

「山麓の一戸建て購入後に発症した多種食物アレルギーの小児例」

○増本夏子¹⁾, 岸川禮子^{2) 3)}, 児塔栄子²⁾, 手塚純一郎^{1) 4)}

- 1) 国立病院機構福岡東医療センター小児科
- 2) 日本アレルギー協会・九州支部
- 3) 国立病院機構福岡病院 アレルギー科
- 4) 福岡市立こども病院 呼吸器・アレルギー科

症例は8歳男児。4歳時山麓に新築された一戸建てに転居した。5歳時に花粉症を発症した。同年3月頃よりトマト、トウモロコシ、大豆、リンゴなど多種の食品で口腔内症状や嘔声、咳嗽を呈するようになった。種々の食品、花粉アレルゲンに感作があり、Bet v1, Bet v2 および症状を呈する食品群のPR10蛋白の特異的IgE抗体が陽性であったことから、花粉食物アレルギー症候群 (Pollen-food allergy syndrome : PFAS) と診断した。

花粉と食物の関連について調査するため、2015年1月から12月に男児宅の庭にダーラム型花粉採集器を設置し、花粉飛散数を計測した。また男児の花粉、食物の特異的IgE抗体価を3か月毎に測定した。男児宅ではスギ・ヒノキ、ヤマモモ、コナラ他多数の花粉が観察され、花粉飛散も福岡市の観測値と比較し最大飛散数、積算飛散数ともに多かった。ハンノキ花粉はほぼ検出されず、同じブナ目であるヤマモモ、コナラ花粉の飛散後ハンノキ、リンゴ、モモの抗体価上昇を認め、関与が疑われた。

幼児期のPFAS報告例は少なく、ブナ目花粉への大量暴露により5歳で発症したと考えられる小児例を経験したので報告する。

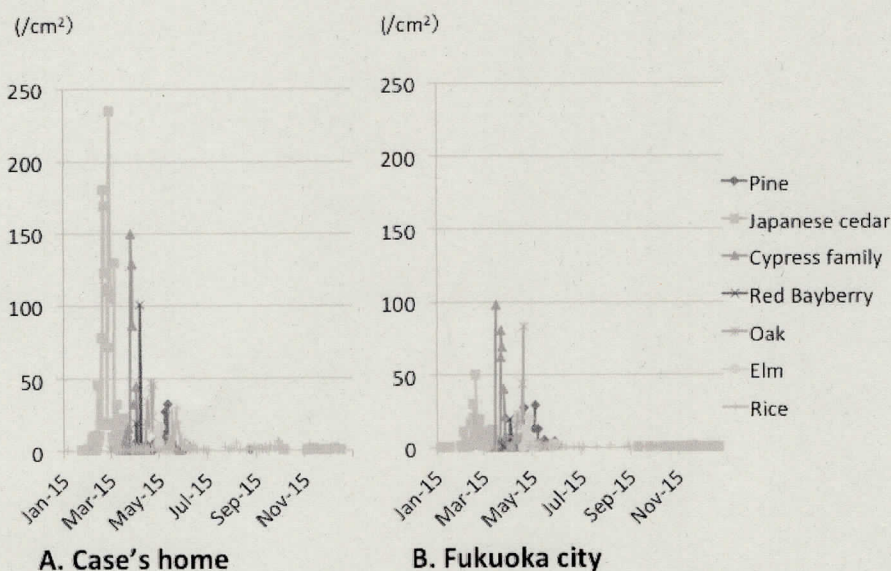


Fig. Daily pollen count at case's home and Fukuoka city